

2017.12.1

現代俳句千葉

127号

巻頭エッセイ

野沢菜漬け

幹事 下村洋子



長野県の中でも寒さが厳しい佐久地方に生れ育った私は、野沢菜漬けになみなみならぬ愛着を持っている。

晩秋、寒風や霜にあたり、旨味と甘さを蓄えた野沢菜を代々家に伝わる大樽に漬け込む。母たちは慣れた手つきで鮮やかに塩を振り唐辛子などを散らす。長い冬に備え、自信に満ちて着々と作業をこなしていく。子供の頃はそんな光景を飽かずに眺めていた。

大家族だった我が家は、野沢菜と沢庵を大樽に二個ずつ漬けるのが慣わしだった。それを翌年六月近くまで大切に食べたものである。

青々とした新漬けも美味しいが、なんとと言っても醗酵し、きりつと鱈甲色に漬かった野沢菜に勝るものは無い。それも樽から出したてでなければ究極の美味しさは伝わらない。

そんな味が恋しくて、夫の退職と同時に始めた家庭菜園に、長野から野沢菜の種を取り寄せ蒔いてみた。驚いた事に立派な野沢菜が育つ

たのだ。嬉しくて早速実家に漬け方を聞き、プラスチックの桶に漬け込んだ。

頃合いを見計らい、わくわくしながら取り出してみたものがっかりしてしまった。味も別物だが、兎に角筋っばい。翌年、これは霜に当てなかつたからに違いない、と懲りずに挑戦。暮れまで収穫せず霜に当てたが結果は同じだった。所詮、千葉県では無理だったのだろう。それ以来諦めた。

名産・特産と云われるものは、その地方独特の気候風土により磨かれ、大切に育まれてきたもの。他に真似出来るものではない。

野沢菜は、信州のあの玲瓏とした空気と昼夜の温度差。独特の厳しい自然の中で育つ。そして、苛酷とも言える寒さの中でじっくりと熟成され、まるやかな美味しさに漬かっていくのだろう。いまだあの味に恋している。

荒縄のそそけ立つ日を寒と云う
塩を振り寒九の水を尖らせる

洋子

目次

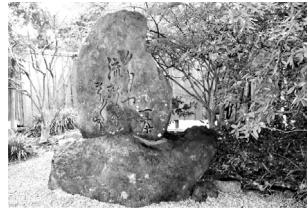
野沢菜漬け 下村洋子	1
秋の吟行会	2~3
諸家近詠	4~6
私の感銘句	7~8
津田沼研究句会報告	9
青葉研究句会報告	9~10
柏研究句会報告	10
新会員・会友紹介	10
益田清氏を悼む	11
ひろば	11
会員・会友の近況	12
掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

秋の吟行会

小林一茶寄寓の地「流山」を巡る

会場 流山市生涯学習センター 平成二十九年十月二十五日(水)



一茶句碑

流鉄流山線は馬橋と流山を結ぶ単線の短い鉄道です。のどかな沿線の踏切には鉄道マニアのカメラマンを時々見かけます。小林一茶が、度々訪れたことのある土地の支援者、馬橋の大川立砂、流山の

秋元双樹は、共に下総葛飾の豪商でありました。今回の秋の吟行は、江戸川の水運と味噌で栄えた流山の秋元双樹亭を訪ねて往時をしのび一茶との交流に思いをはせる吟行となりました。生憎の小雨でしたが六十名の参加者が千葉県内各地から集いました。
流山鉄道の平和台駅に十時に集合。流山在住の篠塚さんの案内で先発隊が出発。お弁当を駅前で購入した人達を待ち私達も歩き始めました。一茶双樹記念館に到着すると縁側には腰を下ろし既に句作に没頭している様子でした。施設内のご案内をしましょうかと施設管理者の申し出がありました、「皆、句作



双樹記念館で句作中



近藤勇陣屋跡

に夢中で話は聞かないでしょうから……」と会長から、やんわりと一言がありましたので、そのまま静寂な俳句作りの時間が流れました。

引き続き流山の旧市街を歩きながら、近藤勇陣屋跡、閻魔堂などそれぞれ自由に散策した後、流鉄流山駅前のタクシー乗り場から四人乗りで生涯学習センターまで移動しました。一時三十分から句会が始まり、予定より早く四時になごやかに終了しました。

司会 徳吉洋二郎・木之下みゆき
披講 高橋健文・羽村美和子・星野一恵
(イザベル真央記)

〔二十位入賞者作品〕(二句のうち一句)

- ① 旧道は好きかと雨のきりぎりす 秋尾 敏
- ② 旅愁なお踏んでしまった団栗よ 山崎 政江
- ③ どの石も語り出す庭神のるす 市川 唯子
- ④ どんぐりころころお江戸には舟で行く 徳吉洋二郎
- ⑤ そうか一茶も双樹も留守か神の留守 金子 未完
- ⑥ 飛石のあしたの方に石榴熟る 田村 隆雄
- ⑦ 秋霖や切つ先句う陣屋跡 木之下みゆき
- ⑧ 破れ柘榴ひねくれ一茶これにあり 平岡 育也
- ⑨ 一茶の碑影を深める秋の雨 矢野 忠男
- ⑩ 陣屋前胡桃の部屋が空いている 小林 実
- ⑪ 変節に似たり洪柿洪をぬく 藤井 遥
- ⑫ 生年月日は小声双樹庵晩秋 増田 元子
- ⑬ 句碑の文字やさしく流れ柘榴の実 笈沼 早苗
- ⑭ 晩秋の張りつめている手水鉢 保坂 末子
- ⑮ 燈火親し腹べこ一茶を待つ双樹 高木 一恵
- ⑯ 雨粒の過去は問わない秋の庵 尾上 康子
- ⑰ 枯山水一糸の水にひそむ秋 北川 昭久
- ⑱ 下総に敗れし浪士鳥渡る 高橋 健文
- ⑲ 杜鵑草さんわり雨の斑を散らす 久野 康子
- ⑳ 箒目に落葉許して双樹亭 倉岡 けい

〔特別選者特選句〕

(秋尾敏会長 特選)

僕たちの街を作ろう芋の露 林 阿愚林

(北川昭久流山俳句協会会長 特選)

白秋の沈思明治の蔵の絵図

高橋 宗史

(渡辺澄副会長 特選)

端正に秋を切り取り双樹庵

なかもと淑子

(並木邑人副会長 特選)

旧道は好きかと雨のきりぎりす

秋尾 敏

(檜垣梧樓副会長 特選)

燈火親し腹べこ一茶を待つ双樹

高木 一恵

(高木一恵副会長 特選)

僕たちの街を作ろう芋の露

林 阿愚林

〔その他作品〕(二句のうち一句、受付順)

時雨くる舌改める閻魔堂

加藤 法子

端正に秋を切り取り双樹庵

なかもと淑子

秋天が落ちるもんかと一茶告ぐ

並木 邑人

千住駅過ぎて一人秋時雨

渡辺 澄

色どりになって遊ぶの味淋船

三上 啓

長月の一茶現はる味淋蔵

檜垣 梧樓

薄紅葉枯山水の石蛙

末廣 陽恵

街角に味淋の香り木守柿

立花 洸

薄紅葉天晴と言ふ味淋の名

山崎 幸子

双樹亭にお茶の間のあり薄紅葉

イザベル真央

秋声や一茶のいしづみ信濃恋ふ

上野 紫泉

どんぐりを踏み雨を踏み一茶の碑

高野 春子

海鼠壁一角いつも秋時雨

羽村美和子

白秋の沈思明治の蔵の絵図

高橋 宗史

僕たちの街を作ろう芋の露

林 阿愚林

どんぐりを拾う空腹なまこ壁

野口 京子

実柘榴や一茶詠みこむ無我の愛

小林 俊子

街道は人の顔似て秋の句碑

山崎 公子

柿熟れてみりんの町を醸しおり

星野 一恵

白障子指を折る我一茶もか

細野 一敏

石榴熟る双樹亭には子らがきて

青木 暉

杜鵑草味淋街角格子縞

西村 英雄

みりんの郷の二万句あまり初紅葉

池田 博臣

百年の鉄路のまちを秋湿り

松澤 伸佳

晩秋をともに歩いて恋なのか

岡田 春人

敷石は誘い上手や初紅葉

石井ひさ子

旅にありかつて一茶も温め酒

黒澤 雅代

そぞろ寒一茶を迎る吟行かな

内田 正成

秋時雨いつかこんな日流山

増田 豊子

秋霖を追いかけ追いかけて双樹亭

岡田 淑子

秋雨に馴染むまちなかミュージアム

山口 明

数屋門色なき風とくぐりけり

吉沢美佐枝

柴折戸を一人づつ入る冬隣

越野 雄治

きりぎりす眉間のやさしい一茶かな

竹中 華那

島ひとつ流して秋の出水かな

松澤 龍一

黎明の秋燻りて陣屋跡

澤田 寿一

古希無料双樹の庭のざくろの実

島 隆史

秋霖や例えばロケの陣屋跡

馬場 馬子

手洗鉢銀嶺一滴手は聖

徳田 悠子

秋雨や義賊の墓へ貝の殻

篠塚 雅世



句会場風景



上位入賞者 (左より)

市川唯子さん
秋尾敏会長
山崎政江さん

◆平成三十一年初詣ミニ吟行会◆

日時 平成三十一年一月二十八日(日)

吟行場所 上総国一乃宮「玉前神社」他

句会場 一宮町一宮「旧寿屋本家」

募集人員 三十名

問合せ先 「ミニ吟行会」係 細野一敏

電話・ファックス 0439-55-5375

諸家近詠

水戸 吐玉

もの囁めばよき音のして秋立てり
月の夜の昔々のやうな山
風止みて芒は影を繕へり
かまきりの顔の半分口であり
浮浪雲引き寄せ安房の初時雨

三須 民恵

野原の近況夏雲の半分
迫り出せる足怖過ぎる夏の雨
裏方の打ち明け話夏祭
さるすべり風の裏側見てしまふ
日日草裏も表もない生活

桃井美千代

竹林のうねり重なり雷兆す
荒々と夏神輿過ぎ風の渦
夏野菜畑は迷路はしゃぐ声
草いきれ充つ遊水池落暉燃ゆ
桑の実に届かぬ指の先の雲

宮川登美子

戦争を知らぬ男の児の庭花火
炎天の小舟三途の川くだる
熱帯夜阿修羅のごとく迎え打つ
自己嫌悪虫袋に寝るといい
余生いつまで夏草に絡まれて

保坂ミエ子

奔流となりし加齢や初日記
拳骨の痛さは今も父の日来
また辞書に頼る鬱の字梅雨ごもり
江戸風鈴風の来る道迷う道
七面鳥裏声で鳴く開戦日

三宅たくみ

おもちゃ箱ひっくり返る春の夜
新樹光私は森の深海魚
パンバスタグラス夕方は淡紅色になる
あいつが死んでからずっと冬晴れだ
東浪見駅の前にとらねこ冬日向

森 章

石段の一段ずつの蟬時雨
鉛筆を削り言葉を削る夏
螢火とゆっくり呼吸合つてくる
色づかぬうちは紛れて烏瓜
灯台へ灯台へ人 風芒

増田 元子

樹々は洗われ雲のすき間の虹未熟
定刻のフェリーへ青い水海月
乳歯抜けたの熱帯夜のストローク
散策の風浜木綿に棧橋に
蛸や揃いの靴が本音いう

三浦 侃

高速道盆の月まで駆け上がる
耳塞ぐ十指緩める幽霊譚
問答は要らぬ新米卵かけ
モノクロの空間街の夕紅葉
風呂吹き冥利に尽きる喉仏

森須 蘭

汗だくの脳から揮発する都心
炎昼の表情筋から壊れだす
影あれば影へと懐く足炎暑
器用不器用混じって蟬の声
耳下腺に鰓確かめる熱帯夜

長井 寛

虚ろなる風のかたちの蛇の衣
昼星の落ちて椿となりゆけり
揺蕩うて夕星になる梅雨ばたる
在原業平に似る青蜥蜴
揺り椅子の弓より生まる秋の紅

松沢 貞津

原つばにだあれもゐないお正月
四方拜宇宙に人の居る不思議
父の日の庭石一つずらしけり
鳥賊のいぼ指に吸ひつく無月かな
日向ぼこまだ書いてない遺言書

相原 一枝

蝶は一頭兎は一羽はこべ摘む
枸杞の芽や矢切渡し棹しずく
アロエ咲く浸蝕するき九十九里
白木蓮の世を祓ふかに今朝をあり
彩雲やつくつく法師いまや急

浅野 天一

吉宗の話などして桜餅
卯の花やみ仏そつとまなこ開け
修業僧駆ける裸足や長廊下
くわつと目を開きし般若稻びかり
緋緘の若武者乱舞彼岸花

秋谷 菊野

風光るいつも列からはみだす子
梅雨晴れ間一年生のプチトマト
声たてず青大将とすれちがう
終活も就活も良夜かな
半島の月水筒に水がない

蜷汗ひとりにさせてしまいきり
にんげんは顔が正面サングラス
白靴のできる夕餉に帰ること
老人になる前触れの赤い羽根
人形を抱く子を抱きぬ芒原

渡辺 澄

記憶ある防空壕よ八月来

山崎 幸子

きな臭き昭和の軋み雁来紅
朝顔の蔓の行方は夢の中
少しづつ忘れゆくなり鴟高音
庭師来て空を整へ秋あかね

前田 孝子

梅満開副住職に嫁御来る
木蓮の白を尽くせし折りかな
柎挿す板戸の割れに潜む闇
噴き出して少子化嗤う栗の花
水打つやひと日の怠惰流すごと

新井 秋芳

戦知らずの水鉄砲で撃たれけり
老いしことやんわりと告げ冷し酒
離れ屋を緑の涼気過ぎゆけり
筑波嶺の雲平らなり秋に入る
虫時雨別るる夫婦遠巻きに

井上けい子

咎ひとつ遠き花野に埋めて来し
散骨の海果てしなく冬銀河
心にも傾きのあり堅香子の花
逢ふときは白いドレスを花辛夷
白菜を割れば顕る観世音

さいかちの樹齢五百や欒ゆる
薫風やひよいと漕ぎ出す一輪車
蓮の葉を転ぶ光のボルカかな
阿羅漢の眼も緩む午睡どき
有る筈の無い歯が痛む寒夜かな

渡邊 廣子

妻の掌のひやり冷たき大暑かな
冷し酒これが最後と通夜の友
銀やんま石棺の縁囁みいたる
冬帽子取らず会釈の老句友
水仙を活けて煤掃終ひけり

宇佐見房司

ひまわりの千の沈黙地震の海
宮大工くさび打ち込む秋の空
どの風も力抜くなり萩の寺
京染に溶け込むように秋の山
神仏に程遠い日日海鼠囁む

若林 佐嗣

梅雨のコードからまり応仁の乱
梅雨長し星の缶詰開けようか
ゼ口戦の転生なりし夏の蝶
屋根裏の詩人静かにお盆です
原爆忌人間困った動物だ

吉野 精

夕焼の海に吸われし吐息かな
古里は胸の奥なる花野かな
朝夕の空より落ちる余寒かな
意に染まぬ物みな染めるか寒夕焼
夜の地震庇う者無し暑さ抱く

池田 幸

緑蔭に一会の出会い赤子抱く
ふるさとの名もなき山の風涼し
糸瓜揺れ明日のことは風のまま
秋声や角を曲れば暮れてをり
生も死も一朝の夢月のぼる

飯島 昭子

炎天やラベル派手なる空ポトル
つちふるや平和憲法右往左往
蟬時雨バンドネオンは膝で弾く
裸婦像の緑に光る乳房かな
ふくらみの折り目正しき紙風船

市川ふみを

しんじゆくで別れてからの雪の山
ひとりならついておいでよひきがえる
盆の月あれも大きなたまごやき
筋肉をほぐす運動神の留守
ともだちのともだちおうい牛蛙

山崎 聰

日の射せば熾烈と思う冬紅葉
水仙の花芽赤裸々に膨らみ
心ここにあらず故郷に夏が来て
海光山翡翠の念珠涼けしや
糸一本しごいて耳に秋来る

愛甲 知子

泣きどころ抑へやんまの大を追ふ
立秋やカフカイよいよ手に重し
梢を越ゆ大むらさきの逃亡劇
三行の葉書に華押す虫鳴く
土間といふ昭和秋灯明る過ぎ

伊藤 希眸

諸家近詠

渡邊 竹庵

銀傘の影レフトへと秋に入る
オアシスの蒼い地球を発ち銀河
柿すだれ土蔵の壁の剥がれ落つ
曼珠沙華台座の傾ぐ野の仏
朝霧を裂いて一番列車かな

イザベル真央

くちびるの退化はじまる秋の風
薄紅葉アールグレイのミルクテイ
花やしき覗いて戻る薄暑光
姥捨の棚田の水の疾さかな
葱坊主わっさわっさと子育て中

浅野 文子

潮汁いのち丸ごと裏返る
抽出しの開け閉め忙し行行子
被災地へ祈る静かさ夕顔よ
よく見れば犬ふぐりなり私なり
黄泉の道途中下車して金魚買う

青木 一夫

子規の忌やたつぷりと張る風呂の水
宇宙への起点となりし曼珠沙華
追伸を書こうよ虹の消えぬ間に
るるんと疲れを知らぬ水中花
底冷えやミサイル通過したらしい

内田 庵茂

ボケットの飴に手がゆく花ぐもり
太陽は今壮年期青山河
相続で売られし林青葉木菟
百兆の腸内細菌夏旺ん
人体は血管だらけ秋暑し

市川 唯子

草に手を切られて八月の自覚
祭へと駆けた処女作なり夜汽車
胡桃割る闘うことは溢れさせ
惑わずに文学を聴く虫しぐれ
十三夜表紙絵の鳥愛撫さる

山崎 公子

黒になる皂莢軽く乾きだす
エラーとは機械の言葉冬嫌い
蠅螂の一葉色づく木で生むか
雨が降る褪める青にも明日紅葉
つわぶきのひっそりと咲く冬隣

秋葉 紅陽

それぞれの向きを極めり赤芙蓉
梅雨晴やこの手で蒔きし豆の列
眼鏡をはみ出してゐる罌雲
人参のみどり加はる里の秋
蜘蛛の囿に顔を盗まれ葡萄狩り

東 國人

三月十一日顔顔が宙に浮く
病院に母捨ててくる花満開
抜きし歯のあとの大穴風薫る
腕組むは父の遺伝子花菖蒲
浮かぶ柚子沈めてはまた浮く平和

石井紀美子

お袋と初めて呼ばれ陽炎える
田を植えてつくづく今日を見ておりぬ
薔薇の夜罪の匂いのふとしたり
ゆうやけを掃き寄せている部活の子
小春日和ひらひらと泣く新生児

山中 葛子

夕焼をはがいじめする純老女
桜に到着めちやくちや雨おんな
鬱多少天上天下さくらばな
われも昔ネオリアリズム泥鰌かな
うららけしのつと霊長目ヒト科

伊東 靖子

花絨緞風の織りゆく晝下り
亡命の要人支えし花の町
宇治金時「小」を樂しむ齢ひかな
四万十の鮎との出逢ひ酒五勺
好物の富有柿供ふ元氣です

上野 紫泉

黙祷は櫛の木實へレクイエム
銀杏のくだくだ落つる優男
十三夜潮ひたひたと航を曳く
なかんづく青柚子一本たわわなり
溪紅葉津軽三味線聴く夜や

浦野 五郎

二百十日ゆつたり歩く盲導犬
風の色ハシビロコウの哲学す
赤い羽根胸に立飲み女去る
流星や貨車連結の音と発つ
秋ついで濡れ煎餅の醤油の香

池田 和人

その日まで踏ん張つてみる西行忌
まぶしきは夏目雅子のをりし夏
おとうとの小さき工場や夜業の灯
電線の先に原発そぞろ寒
被災地に苦界満ちるて麦芽ぐむ

私の感銘句

川又 優

作者名 号頁

古都残映辻に遭ふカフカの眼
長男の文字のはみ出す星祀り
敬老の日に反戦を兜太吠ゆ
冬うらら誰も孤独を口にせず
寒いねと家なき猫に声かける
千の眼と千の御手にも緑射す
蛇穴に入る二十等身をまるめ
尊厳死白桃の種が大きい
大の字も川の字も好き畳替
傘寿米寿卒寿ずらりと松の内
傘寿米寿卒寿ずらりと松の内
正月松の内に揃って八十歳、八十八歳、九十歳と三姉妹のように思われるのですが、一家に集まり新年を迎えられることはとても幸せです。昔話に花が咲いて賑やかにお孫さん達を囲んでいる様子が浮かぶようです。私も三姉妹ですが、出来ればあやかりたいと思う今年の元旦でした。おめでとうございます。

小多田文字

そのへんで遊んでいます仏の座
戦なき世を慈しみ返り花
街に来て百合はネオンに疲れたる
春の空仰ぐ羅漢の百面相
春帽子かぶって並ぶ新生児
だまされてやるか白玉よく冷えて
柿青し物の哀れのように落つ
この星に生れた奇跡ソーダ水
蜻蛉より遠いところを日暮とす

森村 文子 120 3
山中 頼子 120 3
吉野 精 120 4
浅野 天一 121 7
イザヘル真央 121 7
加藤 法子 122 2
蛭名 節昌 122 3
小野 功 122 4
塩野谷 仁 123 4

高野 春子

一滴に無限の真昼しゃぼん玉
蠟梅の背後ぼわんと妻でいる
やはらかな邪鬼に捕まる暮の春
知恵の輪のはずれない日の蜃気楼
微のひらき切るまで親である
放心のごとく風鈴山頭火
月光がピアノの音を狂わせる
伊勢海老いろいろあつて夫婦でいる
蔓たぐりあるひとりとはこんなもの
地の底も良夜なるべし樹木葬
誰からも遠い時間を木の実降る

松澤 伸佳

凧にないしよばなしを攫はれる
雨の日は雨の詩を詠む沈丁花
煮凝は骨閉じ込めるための嘘
やはらかな邪鬼に捕まる暮の春
躰糸抜くたび白くなる海馬
紫木蓮酸素の薄くなる虚空
眠れない夜は一つの青林檎
原爆忌ジャングルジムに足あまた
自転車降り手火花の客となる
紫陽花の後ろの後ろの鬼がおり
栗山美津子
ひとひらはあそばせておく夕桜
水で割る火の国の酒月おぼろ
立春や最寄りの駅に待つという
独活の白刺む誤解のないように
公園の遊具丸ごと灼けてある
しばらくは等身大の春に座す

黒澤 雅代 123 5
森須 蘭 121 6
上野 紫泉 121 6
東 國人 121 7
伊藤 希眸 122 2
大見 充子 122 2
川嶋 悦子 122 3
岡田 淑子 122 3
片山 依子 123 4
椎名 鳳人 123 4
塩野谷 仁 123 4
元橋 孝之 120 3
三苦 知夫 120 4
吉岡 一三 120 5
上野 紫泉 121 6
秋谷 菊野 121 6
浅野 文子 121 7
井上きよ美 122 2
神作 仁子 122 3
清水 重陽 123 4
倉田たへ子 123 6
馬淵 津枝 120 3
三苦 知夫 120 4
横須賀洋子 120 4
青木 一夫 122 2
大木 凉子 122 3
小野 功 122 4

金子 未完

空のエースすべて直球流れ星
立春や最寄りの駅に待つという
一刷けの雲へ鯉跳ぶ河口堰
秋深し全ていいえと問診票
風薫る初検診の赤子のドレス
点々の先の未来図ゆきやなぎ
草餅の匂いの中にある慕郷
夕焼の帆をたたみいるスペイン語
地の底も良夜なるべし樹木葬
蜻蛉より遠いところを日暮とす
空のエースすべて直球流れ星

少年野球の頃から、エースと言われる人は、直球に磨きをかける。日本ハムの大谷投手（十二歳）は、現役最速の一六五kmの直球で勝負する。でも年齢とともに球速は衰えてくる。プロ野球の歴史の生き字引でもある四百勝投手の金田は、全盛期一八〇km直球で勝負したと自慢している。でも「流れ星」となった最後は、六〇km前後の超スローカーブで勝負した。球威の衰えをテクニクでカバーしてきた。これも速球王の宿命である。

近藤 幸子

ビードロのうすくらがりの寒さかな
洗い立てジーンズ動き出す五月
ぼうたんの白の充実悔いうつす
しつけ糸抜いてあしたの花しろも

加倉井允子 123 4
國武 和子 123 4
窪田 俊作 123 6
近藤 幸子 123 6
吉野 精 120 4
横須賀洋子 120 4
八木 邦夫 120 4
秋谷 菊野 121 6
イザヘル真央 121 7
池田 博臣 122 2
青木 一夫 122 2
岡田 淑子 122 3
椎名 鳳人 123 4
塩野谷 仁 123 4
吉野 精 120 4
山崎 聰 120 3
馬淵 津枝 120 3
上野 紫泉 121 6
渡邊 廣子 121 7

春の日の扉開ければ絵本降る
 飯島 昭子 122 2
 だんだんと子の離れゆく潮干狩
 池田 和人 122 2
 飯を炊く蟬は七日の露を吸ひ
 伊藤 希眸 122 2
 大いなる春の光をもらひけり
 をがはまなぶ 122 4
 眞昼間の寂光まとう秋の蝶
 佐々木幸子 123 4
 頼る杖ありて朝顔咲き登る
 齊藤すず子 123 6

佐々木幸子

わが影と石の翳濃く秋惜しむ
 山崎 幸子 122 2
 世に遠く拗ねて樹上の蝸牛
 植原 安治 122 2
 たんぼ野たればきつとブータンへ
 伊藤 典子 122 2
 疑いの深まつてくる朱の牡丹
 青木 一夫 122 2
 一木を人体としてどう芽吹く
 菊地 京子 122 2
 しばらくは等身大の春に座す
 小野 功 122 3
 平安京の虫の闇なら行つてみる
 清水 伶 122 4
 茶が咲いてむかしわれらに擦過傷
 塩野谷 仁 123 4
 マボロシを観る人に会う蟬しぐれ
 坂間 恒子 123 4
 胸に潮満つるときあり忍冬咲く
 黒澤 雅代 123 5

西澤 繁子

ひとりにはひとりかわかる水中花
 尾形ゆきお 123 4
 平安京の虫の闇なら行つてみる
 清水 伶 123 4
 誰からも遠い時間を木の実降る
 塩野谷 仁 123 4
 ゆさゆさと村がふくらむ秋日和
 國武 和子 123 4
 噴水や真似て広がる児の遊び
 口村 洋子 123 5
 渋柿の札ぶら下げてありにけり
 國分 三徳 123 5
 画用紙の半分は満開秋桜
 小池美佐子 123 5
 おーおーと神の降り来し里祭
 金田めぐみ 123 6
 夏帽子夕ぐれ雲を一万歩
 倉田たへ子 123 6
 叩かれて打たれて野火の太りけり
 重田 忠雄 123 6

田端 重彦

敬老の日に反戦を兜太吠ゆ
 松本 静頭 120 3

月光のまわす宇宙の万華鏡
 山中 頼子 120 3
 化学式並ぶノートや父の文字
 山菅 恵子 120 5
 木の芽風受胎告知のフレスコ画
 愛甲 知子 121 6
 鳥雲や峠の上の遍路杖
 池田 博臣 122 2
 原発の風くる村に芋を干す
 川又 優 122 3
 火宅抜け桜浄土に置く五体
 小野富美子 122 3
 我らみな無頼派ぐずれ海鼠噛む
 塩野谷 仁 123 4
 赤のまま人はそんなに変われない
 泉 志眞子 123 4
 傘寿米寿卒寿ずらりと松の内
 佐久間眞城 123 5
 傘寿米寿卒寿ずらりと松の内
 佐久間眞城 123 5
 お目出度いお正月にお身内の長寿の方々が、
 お友達との顔合せのお祝いの席か、又は初句会
 であろうか。長寿社会の縮図は俳句会でも同様
 である。いずれにせよ自分の足で外出できる健
 康寿命を維持するように努める事が大事である。
 国家予算の三分の一を超える社会福祉費の軽減
 の為にも、健康である事は微力ながらの社会貢
 献の一つであろう。

檜垣 梧樓

軍服の父より知らず浮いて来い
 加倉井允子 123 4
 寝たきりにならないやうに干鱈噛む
 片山 依子 123 4
 おみなめし母似と言われ母知らず
 國武 和子 123 4
 陽炎に押されたる人転びけり
 小林 実 123 4
 ぶらんこに座りこんなに脚あまる
 里見 さち 123 5
 死ぬ程に好きと云われし聖夜かな
 佐久間眞城 123 5
 葛根湯効きし夜長のトーマス・マン
 佐藤 映二 123 5
 おーおーと神の降り来し里祭
 金田めぐみ 123 6
 満月の生みおとしたる隠岐の牛
 重田 忠雄 123 6
 風もまた風にかかる秋深し
 島田 翠松 123 6
 死ぬ程に好きと云われし聖夜かな
 佐久間眞城 123 6
 佐久間さんを存じ上げている訳ではない。五

句の内、他に「初夢に初恋の人卒寿かな」があ
 るから氏は多分、御年九十の翁であろう。その
 卒寿翁（私は三国志の関羽のように美髯を蓄え
 た方かと勝手に想像する）が、「死ぬほどに好
 きと言われし」と臆面も無くのたまう。その
 相手、最愛の奥様は既に亡い。他に「妻とい
 う女罷りぬ秋の暮」、「行くわよと手を振る妻や冬
 銀河」の二句がある。すべて卒寿翁の哀傷歌、
 絶唱である。

棗 楳伊

山茶花やはなやかに散る村はずれ
 柳沢 純 120 3
 人の日や潮騒のごと鍛鉄音
 三苦 知夫 120 4
 街に来て百合はネオンに疲れたる
 吉野 精 120 4
 春立てり嫁した娘の部屋で大の字
 森須 蘭 121 6
 あの犬は戻れたろうか山眠る
 渡辺 澄 121 6
 ロボットの介護の日日へ春隣
 池田 幸 121 6
 行くところまで行くつもり花筏
 相原 一枝 121 7
 だまされてやるか白玉よく冷えて
 加藤 法子 122 2
 山からの風ある高さに柿熟るる
 片山 依子 123 4
 電工の昼餼は地べた花吹雪
 重田 忠雄 123 6
 あの犬は戻れたろうか山眠る
 渡辺 澄 123 6
 現俳協の句は尖つたものが多い。その中で自
 然を率直に詠つた純、依子句を見出すと気が休
 まる。現代を衝く句では精、幸、一枝句が高柳
 重信主張する寓意が利いている。いつの世にも
 通ずる人事句は人生に暖かい。蘭、忠雄句。そ
 れから法子句のような表現の一層の発展を待ち
 たい。これら全てを俯瞰して澄句は叙景、心情、
 季語の使い方等万端において抜群である。なお
 職場を描いた知夫は忠雄句と共に外し難い味がある。

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

第三〇三回 (平成二十九年八月八日)

司会 徳吉洋二郎

鬼灯を鳴らし大人になつてゆく 岡田 淑子
 キリストよどうだい一杯星まつり 吉野 精
 風見鶏カラカラ哭けり終戦忌 徳吉洋二郎
 ふるさとの低い屋根根むくげ咲く 山中 葛子
 半身を病みて蜥蜴のしつぽかな 池田 博臣
 あの日から向日葵はずっと立ちん坊 横須賀洋子
 夏の旅運河に影置くモノレール 股野 久子
 玉碎の浜を駈けぬく大夕立 佐藤 晏行
 爺も孫も乱世の袷着てゐたり 檜垣 梧樓
 蓮が咲き朽ちゆく時間椅子にあり 小林 実
 退屈な猫躍らせる夏の蝶 村上 澄子
 秋茜介護の介は何の介 白木 暢子
 メロン泥棒追いかけるポリスマン 金子 未完
 ゆれながら考えている葛の蔓 楠見 恵子
 降るように蟬しぐれ境内しづか なかもと淑子

第三〇四回 (平成二十九年九月十二日)

司会 佐藤 晏行

ヒトシ来る手斧猪ぶらさげて 徳吉洋二郎
 秋霖のときどき獣臭きかな 楠見 恵子
 曲り屋のような男に遇う秋日 池田 博臣
 千手観音一気ニコスモス咲きました 小林 実
 身に付きし愁ひのいくつ梨を剥く 深山きんぎょ
 鶏頭の正面南無阿弥陀仏とも 山中 葛子

バッタ高跳びす少し悪いことして
 草紅葉に横たわる者補陀落寺
 金木犀今日の夕餉は星三つ
 捨てられた絵筆雨降る原爆忌
 忌を修す何処まで届く蟬の声
 手を鳴らし父が母呼ぶ居待月
 人生の午後の悦楽秋うらら
 喪主といふ妻の座とろろ汁のばす
 追伸に深き悩みや秋ほたる
 霧の世のフロントガラス魑魅魍魎
 鳴く蟬や声で知らせて自死をせり
 金色の蛸獲る老夫腰のばす
 水爆もTOTOの便座も秋の蔭

句会に続き大畑前会長の遺句集「普陀洛記」の鑑賞会兼偈ぶ会を催した。思ひ出話は尽きず、二次会へと流れた。

第三〇五回 (平成二十九年十月十日)

司会 檜垣 梧樓

曼殊沙華ポキポキたたむ膝頭 村上 澄子
 母の犬も明日は施設へ白い秋 竹中 華那
 天高し牛の尻尾に眼玉あり 金子 未完
 鳥渡る上海帰りのリルの唄 吉野 精
 英英と和英英和を引く夜長 股野 久子
 曼珠沙華だれかに水を貰いけり 楠見 恵子
 パジャマからはみ出しているそぞろ寒 佐藤 晏行
 こおろぎや下北沢の楽屋裏 岡田 淑子
 月が四角いと誰が困る総選挙 白木 暢子

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

第七十四回 (平成二十九年八月二十四日)

司会 三須 民恵

秋麗の椅子告白の機を逃す 馬淵 津枝
 これはまた素頓狂やかまどうま 鈴木まんぼう
 みずくらげ全形をもて胸騒ぎ 越野 雄治
 月光や机があつて椅子がある 小林 実
 椅子ねらう時代は忘れかき水 三須 民恵
 ポリープが育つ八月十五日 細根 栗
 蟪蛄や二三親等全て逝く 山崎 幸子
 逝く夏の影のはりつく車椅子 長濱 聰子
 おどり子のふと来て椅子にバラ匂う 吉野 精
 ガラスの欠片ピカッと爆心地 細野 一敏
 てんと虫森にならびし婚の椅子 石井紀美子
 虫取撫子遊んでばかりいる 加藤 法子
 天の川車椅子もて渡らむか 棗 梢伊
 止り木の恋の雫や水中花 徳吉洋二郎
 大西日縁台将棋まだ続く 矢野 忠男
 ブルトレ遥か東京バスタの今日の秋 並木 邑人

十六夜や身の内の白湯こぼれだす 徳吉洋二郎
 柿落葉風来坊によく似合う 小林 実
 沖よりもまぶしい遠さ秋燕忌 山中 葛子
 つづれさせずすべての影の遠さかり 池田 博臣
 キリンは虹の子明日もいい日 松崎あきら
 丹念に子育てせよと鱗雲 なかもと淑子
 どんぐりの沈む公園もういいかい 横須賀洋子
 水草を秋の金魚が分けて出る 檜垣 梧樓



●第七十五回 吟行会 (平成二十九年九月二十八日)

前夜からの大雨で交通機関が乱れる中、十三名の参加を得て、水戸黄門ゆかりの名園小石川後楽園を助さん、格さんをお供に吟行会を楽しんだ。

案内 矢野忠男
司会 徳吉洋二郎

七人の案山子都会の薄曇り
目で橋を渡るすとんと天高し
蓮の実飛んで絶叫マシシかな
九八屋の酒は何処に野分後
みのり田を囲みて人形の思案
叫びたきところへ離れ彼岸花
円月の結界を踏みはず藤袴
出たかった句座に未練の吾亦紅
初鳴の水脈までの距離うすみどり
秋の蛇隠れ上手な黄門さん
雨あとの白萩低くうなだるる
初紅葉池をにぎわす鯉のエサ
八方へ雨の重さの白い萩

□柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第六十三回 (平成二十九年八月五日)

ひと恋うは野生の証夏あざみ
黒瞳開く赤ちゃんパンダ夏休み
一斉に荒海になる芒の穂

高橋 宗史
佐藤 鈴子
長井 寛

熱熱のミルク紅茶の涼しけれ
みんみんや花人の句碑を目覚さす
振り向けばつねに被写体夏少女
幼名で呼ばれ老舗の心天
掛け声や子供神輿の華やかに
空豆のような耳揺る夕の鐘

●第六十四回 (平成二十九年九月九日)

司会 小林 俊子

三行の葉書に華押すず虫鳴く
さやけしやいつも変わらぬ森の影
三百万殺して負ける終戦忌
ほんとうは鉄の声です夕かなかな
萩揺るる他人も自分も赦せず
葉がくれの魑魅でありし葛の花
どんなに閉めても虫の悲しむ声
こぼれ萩素直な風と向き逢へり
十六夜の卑弥呼の覗く八咫鏡
川霧のゆったりと山整える
馥郁たる御居処よ戦後七十年
モナリザの視線はうしろ秋の声

●第六十五回 (平成二十九年十月七日)

司会 小林 俊子

通院も仕事のひとつ秋茜
あなもたいなや大栗の渋皮煮
完璧な男のシチュー小鳥来る
月魄の父母の国ならいつか行く
本の虫まつりごとの虫虫すだく
枯野原噂話を閉じこめよ
霧に入りあしたの霧を見失う
母と組むそぞろの影やこぼれ萩

岡田 春人
野口 京子
下村 洋子
小林 俊子
井上けい子
榎木 きよ
伊藤 希眸
井上けい子
岡田 春人
木之下みゆき
小張 直子
下村 洋子
高橋 宗史
長井 寛
野口 京子
松澤 龍一
小林 俊子
岡田 春人
木之下みゆき
佐藤 鈴子
下村 洋子
高橋 宗史
榎木 きよ
長井 寛
小林 俊子

◆平成三十年度俳句大会◆

ただいま作品募集中!

締切りは平成三十年一月三十一日です。お早めにご応募下さるようお願いいたします。(詳細は同封チラシをご覧ください。)

◆平成三十年度「私の感銘句」募集◆

今号で本年度分の掲載は終わります。来年度掲載文を募集しますので同封の用紙で奮ってご応募下さい。

新会員・会友紹介

四街道市みそら 阿部さくら(会員)

(推薦者 千葉 信子)

新涼や縫はず終ひの夫の衣

これまでの道これからも秋さくら

日もすがら素つびんでゐる野分あと

我孫子市高野山 青木 暉(会員)

(推薦者 大牧 広)

轉やもの言ふ人のばやきあり

春生きてまだまだ生きてなほ生きて

山吹や寺檀家なく門朽ちぬ

流山市若葉台 多胡たかし(会員)

(推薦者 河野 薫)

火口壁崩落いまもななかまじ

時折は小さなこだま山眠る

満天の星降る村や霜のこゑ

追悼 益田 清 先生

三苦 知夫

去る十月二十三日、当協会顧問、益田清先生が逝去された。享年九十歳。

先生の俳句人生は昭和四十年代半ばを境に舞台が九州と千葉に二分される。

師系は横山白虹（自鳴鐘）主宰、第二代現代俳句協会会長。昭和二十一年に師事して以来、生涯を通して人生の師と仰いだ。

浪漫豊かな独自の作品を多く作り、「永遠の抒情詩人」とも評されたが、特記すべきは凄まじい迄の行動力にあった。

昭和三十年代初頭、長崎の金子兜太、大分の田原千暉、熊本の窪田丈耳、戸畑の穴井太等九州各地に割拠する群雄に呼び掛けて、「九州俳句作家協会」を創設に導くと共に、『九州俳句』を創刊させた。

これが、やがては「現代俳句協会西日本地区会議（横山白虹会長）」へと繋がる。何れも三十歳台の若き益田清が事務局長を担当した。

昭和四十五年、千葉県に移住するや『きみさらず』を創刊。新人育成を図ると共に「現代俳句協会千葉地区協議会」（現在の千葉県現代俳句協会）設立に参加し、平成四年より二期六年間、会長を務めた。平成十五年からは「千葉県俳句作家協会」会長を二期在勤。引退後は地元で二つの俳句会を楽しみに、悠々たる生涯であった。

のぼりつめ風を見ているかたつむり 清
(台掌)

ひろば

■千葉県民芸術祭 第59回千葉県俳句大会開催

千葉県俳句作家協会主催で十月十五日（日）、千葉県文化会館にて開催された。当日はジュニアの部の表彰も加わり参加者百六十名の盛大な俳句大会となった。俳句大会に先立ち現代俳句協会副会長長鳴戸奈菜氏より特別講演を頂いた。
(大会事務局記)

◆事前投句の部（雑詠）

千葉県知事賞
星飛んで峡はすみずみまで故郷 関戸 信治
千葉県議会議長賞
灯されて祭り大きくなりけり 原 瞳子

千葉県教育長賞
花あやめいのちもあるもの水濁し 岡澤 田鶴
千葉県俳句作家協会会長賞
草笛を吹く一度目は風の音 西野 桂子

千葉日報社賞
日の匂ふ秋の簾となりけり 安部由美子
千葉市観光協会会長賞
父の日は無声映画のやうに暮れ 柏崎清一郎

◆席題の部 席題「木の実」「葉」
【招待選者・鳴戸奈菜先生特選句】
てのひらを幼なくしたり木の実独楽 菅谷たけし

【特別賞受賞者代表句一句】
千葉市長賞
もう誰も居ない母校に木の実降る 門谷 杜人

千葉市議会議長賞
ポケットの木の実に鼓動あることし 加藤 峰子

千葉市教育長賞
ちははのはのはるけきははそ紅葉かな 川合 憲子

千葉市文化連盟会長賞

しばらくは落葉にあずけるたき庭 森川 哲男
千葉テレビ放送賞
木の実落つ天体少し傾けて 塩野谷 仁

■第一四七回野田俳句連盟秋季俳句大会

平成二十九年十月一日（日）、野田市興風会館に於いて第百四十七回野田俳句連盟秋季俳句大会が開催された。出席者五十八名、欠席投句者三十三名であった。席題は「桃」。戦後すぐに開始した俳句大会だが、第百五十回記念大会が一年半後に迫っており、準備の大会になった。
(高橋宗史記)

来賓選者・会長詠（順不同）

伊藤希眸先生 白桃をがぶり誰もがいつか死ぬ
北川昭久先生 女郎蜘蛛漢の掛かる誤算かな
藤岡貞夫先生 毒舌はいまだ健在山椒の実
実籾 繁先生 毬栗や青二才とは不謹慎
秋尾 敏会長 満月や足踏みミシンうごきだす
入賞者（三句合点）代表句 ○内は順位市長賞

秋の水飲んでことばの澄みにけり 倉岡 けい
議長賞
語れない過去あり赤のままにいる 田村 隆雄
教育長賞

致死量の夕日へ蓮の実が飛び 青木 一夫
連盟賞
完熟の桃を犯した三鬼の眼 西崎 久男

⑤ 秋空に音を投げ込む鉄工所 松本八重子
⑥ 断層の億年を撫で銀すすき 伊藤 希眸
⑦ 愚痴一つまあるく抱いて夜の桃 山中とみ子

⑧ 沈黙のきれいな時間花すすき 小野 功
⑨ 三人で走り三着秋高し 星野 一恵
⑩ 十月のデモクラシーの深い穴 市川 唯子

《會員・会友の近況》

・妻に先立たれ三年、今更に途方に暮れてお
ります。妻に看取られてあの世に行くと思
手にきめておりましたが：困ったものでは
なかなか俳句にも身が入りません。

(水戸 吐玉)

・主人が車の運転が出来る内に(東金 吐玉)に
初めて行ってみました。静かで心落ち着く
所でした。たった一人、周囲をもくもくと
走る女性が居ました。見えない所で努力
に心打たれた一日でした。(三須 民恵)
・前の家の庭に一本の泰山木の木が植えられ
ています。二年程前お母さんが亡くなって
から植木屋さんを頼まなくなり、今では二
階の屋根と同じくらいの高さになってしま
いました。娘さんに聞いても日陰が欲しい
から切らないと云うのです。嫌だなあ！と
思っていたのですが、此の頃毎日鶯が来て
鳴いているのです。そうなるかと!!

(松沢 貞津)

・後期高齢者、運転免許更新も今回最後とし
ます。(浅野 天二)
・今は落花生の最盛期。我が家は市場には出
さず、贈答用と三時のおやつのために作っ
ている。秋のうちは茹でて食べる。冬はスト
ーブの上にフライパンを置き炒って食べる。
気長にコロコロとこころがす。これがうまい。

(秋谷 菊野)

・俳句を通し皆さんとの繋がりが元気で居ら
れることと思ひ、また納得の出来る俳句を
願ひ頑張つてあちこちに出掛けることにし
ております。(山崎 幸子)
・私の棲む部屋からは常におおあおと繁つた
森が見えます。朝起きると先ずその森に接
拶、夕方もお休みと云ってカーテンを引き
ます。最近「森の在所」という第二句集を
出しました。(井上けい子)
・何時も吟行会には参加したいのですが、視
力が弱っていて、出掛けるのにも苦勞する
状態です。近くの「大網俳句四季の会」で

百歳の富子さん等と楽しんでおります。

(渡邊 廣子)

・東葛地区に有る芭蕉、一茶の句碑を訪ね歩
き、過日ある会合で報告しました。芭蕉の
ものは北小金「本土寺」に建立の句碑、一
茶のものは流山「光明院」にある双樹との
連句碑が好きです。(宇佐見房司)
・膝痛に悩んでいます。俳句だけはと思ひ、
句会は欠席しないよう心がけております。

(飯島 昭子)

・「ねばならぬ」を封印しました。できること
の八割達成が丁度良い感じでしょうか。質実
な名古屋人気質を根底にゆつくり五十代を
見つめているところです。(愛甲 知子)
・京鹿子に入会して何十年になるか数えられ
ない位に在籍。すっかり古株に。句歴の大
半を千葉現俳に刻み、老いても若い若い
と煽てられながら、句作に句会に下手な句を
持参して出掛けている。特に病いを持たな
いというの俳句のお蔭かと思つている。

(伊藤 希眸)

・体調が優れず一つ二つの俳句会と少しばか
りの畑で野菜を作りながら楽しんでおります。
(青木 一夫)

掲示板

《會員・会友異動》

- 逝去 (會員) 益田 清
- 入会 (會員) 玉山政美、菱木良一
- 退会 (會員) 植原安治

平成二十九年第三回幹事会

日時 平成二十九年八月二十九日(火)

午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、秋の吟行会について
- 二、第一二六号会報について

三、現代俳句協会(本部)の動向について

①七十周年記念全国大会について

②県内図書館講座について

四、関東甲信越静ブロック連絡会議について

五、多摩地区俳句大会報告

六、平成三十年総会・俳句大会について

七、各研究句会の状況について

八、その他 ①會員・会友の入退会状況

②次回幹事会(十一月二十八日)を予定

③その他

事務局・編集部だより

● 平成三十年度総会・俳句大会が平成三十
年三月十八日(日)に開催されます。

● 皆さんの方のご参加をお待ちしています。
ご予約下さい。

● 會員・会友の近況で紙面の都合上、掲載
できなかった方は次号に繰り延べさせてい
たきます。申し訳ありません。

現代俳句千葉 第一二七号

平成二十九年十二月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

現代俳句千葉編集部 会長 秋尾 敏

〒261-0004 千葉市美浜区高洲

三十五-六-一六〇二 徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局

〒278-0043 野田市清水五二七-一〇

高橋 宗史

TEL: FAX 〇四一七一二五-一三三八二